第70回　大阪府青少年読書感想文コンクール

高校の部　特選

◇私たちに必要なもの　同志社香里高２年　縄田沙宮蘭（さくら）さん

私はこの作品を手に取るまで、定時制高校についてほとんど何も知らなかった。その中に広がっていた景色もなじみ深いものではなく、まだ高校生の、夜道を堂々と歩くこともできない私には、想像すらつかないような光景も描かれている。しかし、私はこの物語に強くひきこまれた。物珍しさから面白がっていたわけでもなく、私はむしろ、登場人物たちに親近感を覚えていたのである。

例えば、柳田岳人や越川アンジェラが感じていたような、周りのみんなにできることが自分にはできないという劣等感は、とても身に覚えがある。また、名取佳純が抱えていた自分の全てを否定的に捉えてしまう感情や、苦しい状況に置かれている大切な人に何もしてあげられないという長嶺省造の無力感、さらに「周りの奴らと自分は違う」と意地を張ってしまっていた丹羽要の気持ちまで、共感できるところがいくつもあった。もちろん、その深刻さや、そう思うに至った経緯などは全く違う。しかし、だからこそ、私は定時制高校に通う人々が、自分には想像もつかないような景色の中で暮らしている人々という私の最初のイメージより、ずっと近しい存在なのではないかと思うことができた。

私たちはしばしば、自分の理解の及ばないものを端から悪いものだと決めつけ、つまはじきにしてしまうことがある。同じように教室で授業を受け、同じような情緒を持つ人々をまるで人間ではないかのように呼び、粗を探すことこそが正しいものの見方なのだと言わんばかりに悪意をもって罵倒する。他人を肩書そのものに押しこめて評価することは、評価する側にとっては楽で、手っ取り早く理解した気になれる方法だが、評価される当人にとってはどうだろうか。高専生という肩書に押しこめられ、正当な評価を受けることができなかったＫのように、夢を諦めざるを得ないほど追い込まれてしまうかも知れない。作中で「自動的にはわからない」と語られた通り、知ろうとしなかったことはわからないまま終わってしまう。私が今回定時制高校について知ることができたのも偶然だ。この機会がなければ、きっと知ることはなかっただろう。情報化が進み、日に日に受け取る情報量が増えていくなか、流れてくるもの全てを正しく理解するのは不可能に近いと思う。それでも、知らないものに対して悪意を持って接し、傷つけてしまうことがないようふるまわなければならない。

この作品は私にそのような気付きを与えてくれただけではない。情熱を持つことの素晴らしさと、熱中できるものに飛びこんでいく勇気の大切さも教えてくれた。私たちは、「学生のあいだに」といった言葉をよく耳にする。それは、体力や自由に使える時間、物事に対する意欲が、年を重ねるにつれて少なくなってゆくといった理由で、あらゆるメッセージに添えられる大人たちの後悔や諦めが詰まった枕詞である。この物語は、そんな諦観を否定してくれているのだ。それぞれ複雑な事情を抱え、ほとんどが成人済の部員たち。そんな科学部が、限られた時間をやりくりしながら、同じように強い情熱をもって協力しあう。彼らの活動を「ただの砂遊びだ」と見下し、高をくくっていた人々の心すら動かして。何より私が力をもらったのは、この物語が単なるフィクションではなく、実際にあった事例をモデルとして描かれた作品であるという点だ。日本地球惑星科学連合二〇十七年大会「高校生によるポスター発表」にて優秀賞を受賞した、大阪府立大手前高等学校定時制の課程と大阪府立春日丘高等学校定時制の課程。私には、彼らと「宙（そら）わたる教室」の登場人物たちが、「いつから始めても遅くない、諦める必要はない」と力強く背中を押してくれているように感じられる。学生時代に得ることができなかった知識や技術はいくらでも取り返すことができる。それどころか、誰もが取り戻すことを諦めていた青春すら手に入れるこ

とができるのだ、と信じさせてくれるような力を感じることができた。

この物語は、私にたくさんのことを教えてくれた。定時制高校についてはもちろん、知らないことを知ろうとする姿勢の重要さ、没頭できるものを持つことの素晴らしさ、それに飛びこむ勇気の大切さにも気付かせてくれた。それらはきっと、日々流れ込んでくる情報の波にもまれ、多くの人が惰性のまま生活し、自分の役割や立場と理想の間でがんじがらめになってしまっているような、現代社会を生きる私たちに必要なものだ。これからは私も、何事も頭ごなしに否定せず知ろうとする姿勢を忘れないこと、没頭できるものを模索し続けること、そして、それが見つかったときには、「年甲斐（としがい）もなく」とか「こんなことやったってどうせ何の役にも立たない」「自分にはできない」といった後ろ向きな思いを捨てて、とにかくやってみることを大切に生きていきたい。

（「宙（そら）わたる教室」伊与原新／文芸春秋）